

地方と地方を繋ぐ 梅原ひろみ

結社誌「塔」六月号の評論「短歌への期待」で鳥取県倉吉市在住の池本一郎が、山陰地方における文芸活動の状況を伝えている。「竹や葛の侵入・耕作放棄地の拡大、里山の縮小、鹿猿猪の跳梁。そして人口減少が何よりも顕著だ。(略)文芸協会や県歌人会は会員が半減し、各文芸誌、各結社、歌会等も同じ傾向を免れない。(略)文芸活動が危機状況にあると言っつてよい」。

先日法事があつて京都の丹波に行つたが、僧侶の四方山話もこれとよく似たものだった。曰く熊を見かけた、アライグマに天井を喰い破られた。以前は四十軒ほどの集落のどの家にも四、五人は住んでいたが、今は空家が半分で残りも大抵が高齢者の一人住まいだ云々。日本中で起きている話だ。A1の登場に怯える前に、動植物の逆襲の方が喫緊の課題なのではと思えてくる。文芸の現状推して知るべし。博物館で微笑ましく見ていた千支の動物達が歌合せをしている中世の絵巻物なども笑えなくなってくる。

東京一極集中が言われて久しいが、その勢いは加速度を増しこそすれ止まる気配は全くない。先日見た統計では二〇一五年からの二年間に日本の総人口はざっと四十万人減っているが、東京二十三区では約三十万人増えている。首都圏全体で見れば、鳥取全

県(五十六万人前後)に近い規模の人口が増加したことになる。

池本は、文芸全般の危機に瀕する地方は「政治より先に」「ポードアレスで考え」るべきで、「結社やグループ枠を外し、自由な交流を図る方向で相互交流が必要であろう」と説く。

若山牧水を一つの柱に短歌県として面目躍如の感ある宮崎を始め、地元出身の歌人の顕彰をきっかけとした地方発の催し(鈴鹿と熱海の信綱顕彰の短歌大会など)があちこちにあるが、また面としての広がりには到っているとは言いがたい。大小の点として存在する各地域での試みを、更に広域で有機的に繋いでいくにはどのような工夫が必要となるだろう。

・南無大師なむだいしとて頼られてかすかな笑みをとかぬ石像
・増量ができますよとか言われても朝よりうどんそんなに食えず

玉井清弘『谿泉』

・ええ恰好せんでよろしと雨のなか朽ちつつ香る梔子のはな

・腰の籠に花菜摘みゆく人影のあなたにかすむ丹波山塊

山下洋『屋根にのぼる』

・天蚕の繭のひかりのうすみどり母はひなたに糸を繰りいき

・薪の火の力が焚いた大根汁 信州味噌が武骨に溶けて

鈴木香代子『あやめ星雲』

・丈高き草に軽トラ沈みをり沈黙深き真夏の浪江

・残雪の落つる気配に振り向けばカモシカは高く空を超えたり

山口明子『みちのくの空』

地方同士を結んでの文芸活動が地道に行われていけば、やがてそれは土地土地に根差した分厚い日本文化の新たな礎となっていくように思うのだが、少し夢想が過ぎるだろうか。